

伊勢齋宮の立地とその歴史的背景

田 阪 仁

〔抄 録〕

伊勢齋宮は伊勢神宮祭祀のために都から発遣された齋内親王の居住施設とその運営に当たる役所があった所である。本稿はそれがなぜ皇大神宮（内宮）から遠く離れた神郡の西端に置かれたのかを考察する。それには、①水害の心配なく最も安定した土地、②恒例の禊に至便な河川に近い事、③官道に接し、かつ外港が発達して、人と物資の移動・運搬に適した水陸交通の要衝であることが不可欠の条件であった。この三条件を満たすのは宮川左岸と多気川右岸に当たる洪積台地の縁辺部しかない。それが後者に置かれた理由は、多気川流域には遅くとも六世紀以来の王権による

土地開発があり、すでに天武の即位段階には八〇町もの土地を高市大寺（後の大官大寺・大安寺）へ施入し得るだけの政治経済的基盤がそこにあったからである。そしてそれは、齋宮跡の発掘調査においてこれまでに検出された官衙的遺構がすべて七世紀後半を上限としている事実と見事に符合しあうものである。

キーワード 齋宮、的形（円形）、天武、胸形（宗像）氏、金銅装頭椎大刀

はじめに

『続日本紀』文武二年九月丁卯条に初見の伊勢齋宮の所在地が、三重県多気郡明和町にある国史跡齋宮跡にあったことは広く知られている。しかし、その齋宮跡から五十鈴川畔の皇大神宮（内宮）までは直

『続日本紀』文武二年九月丁卯条に初見の伊勢齋宮の所在地が、三

線距離でも約一四〇一五キロメートルはある。そのため、なぜかくも遠く離れた所に設置されたのかという疑問が、これまで異口同音に発せられてきた。

この本質的な問いかけに応えるためには、伊勢神宮及び齋王制度の創始、あるいは神宮司、神郡司の所在地など、いくつかの基本的事項

にかかわって論述するのが本来の姿であるが、問題が多岐にわたるので、ここでは単に齋宮跡の現在地からみた伊勢齋宮の立地条件とその歴史的な背景を整理して、解決への糸口を手繰り寄せたいと考えている。

そのために、この課題に関する主な先行研究の概要を紹介してその疑問点を指摘し、その上で自らの卑見をのべて、江湖のご批判を仰ぐことが本稿の目的である。

（二）先行研究の概要と疑問点

伊勢齋宮の立地問題を取り上げた先行研究は概ね二類に分けられる。即ち、（A）太陽神祭祀（太陽信仰）との関わりから割出そうとする説と、（B）律令制度下の齋内親王を女性祭祀者の政治的敗北と捉え、それゆえに都からも神宮からも遠ざけられたとする説とである。ここでは前者（A）に、①井上辰雄氏、②三村幹弘氏の説、後者（B）には③林一馬氏の説を掲げる。

（A）①井上説について

同氏の説では、奈良の三輪山と箸墓を結ぶ東西延長線上に伊勢齋宮跡も河内の日置里、淡路の久留麻（伊勢久留麻神社）もあり、同名の鈴鹿市白子の久留麻神社は淡路久留麻とも関係がある、との前提がある。そして、大化前より伊勢の多気郡有爾郷は天照大神の祭祀の中心地で、その太陽神祭祀にかかわるとする日置部の所在地（多気町足田―日置田）を主軸に、伊勢齋宮が鈴鹿白子の久留真神社と久居の戸木（日置）とを結ぶ二等辺三角形の一角に位置すると指摘して図示する。

断言を慎むべきだとしつつ、「日置氏がその居を定める時、聖地を基準として、一定の方位を強く意識していたことを窺わせるもの」だとされた^②。

伊勢神宮の祭祀や齋王制度に日置氏がどう関わったのか不詳でコメントはできないが、現代の地図上で導き出された図形的位置関係（二等辺三角形）のもつ意味が判然としない。果たして古代祭祀上の重要事項を決する際に、それがあつた種の数理科学的原理から必然的に導き出されたものか否かはまだ立証されていない。何より天照大神を祭神とする伊勢神宮自体が氏の言われるその三角形から外れるのも不可解である。この種の議論には偶然性の介在する余地がある。仮に何らかの方位上の原理に基づき割り出した三角形の一角がたまたま泥沼地帯であれば、そういう所には決して伊勢齋宮を置かなかったのではないかと、この素朴な疑問が残った。

（A）②三村説について

氏は、ゲーター祭の行われる神島は、神体島として伊勢湾一帯の海人族の祭祀センターであるといい、その神島の東西軸上に「太陽信仰の聖地たる」『大淀齋地』―それは神宮司や神郡司の置かれた有爾郷から伊勢湾に注ぐ笹笛川の河口は現在より約一・五キロメートルほど内陸の御厨野（美久里野）辺りにあつたとし、齋王はそこで神嘗祭の禊を行ったとの前提で―があつたと仮定。その『大淀齋地』に近く、かつそこを見下ろす最も安定した洪積台地の最奥部に伊勢齋宮は立地した。神島を太陽信仰の祭祀センターとする伊勢湾地域の地理的祭祀構造こそが、伊勢齋宮の立地の根底を用意した、^③という。

言うまでもなく、齋王は伊勢神宮祭祀に奉祀するために発遣された天皇の名代である。その宮殿の立地が神島によって規定されるのかどうかに疑問がある。そもそも肝心の伊勢神宮が氏の言われる東西軸上にはない。第一、ゲーター祭の起源が果たして何世紀まで遡り得るのかという、八代神社神宝（考古遺物）とは別に考究されるべき問題もある。^④氏のいう「伊勢神宮まで遠いという」齋宮の地理的不合理性」は民俗宗教学的理念からだけでは説明し切れず、もつと当該地域に密着した社会経済的、政治的背景からのアプローチも必要であろう、と思う。

（B）③林説について

氏は、律令制下の齋王は俗権の頂点たる天皇の身代わりとして派遣された潔斎者に過ぎず、神宮祭祀を主導したわけでも、王権の宗教権を掌握したものでもない、至聖の中心から遠ざけられた存在であると言ふ。だから伊勢齋宮が都からも伊勢神宮からも遠く離れた神郡の縁辺部に当たる場所に立地したのは、そのような齋王の性格に見合うものである、とする。^⑤

王権における「中心と周縁」^⑥の問題は文化人類学上も恐らく重要であろう。律令制下の齋王制度は敗者的側面をア・プリオリにもつのかも知れない。折口信夫は「大化の改新の一つの大きな目的は、政教分離にあった」^⑦としたが、それは「女君の政治的権威の失墜」^⑧による「敗退としての政教分離」（同上）との見解や「倭王権の最高守護神の祭場が伊勢に移された最大の理由」を従来の女王制の廃絶（女性最高司祭者の地位の終焉）にあるとした見解にも通じるかも知れない。^⑨

また、仮王としてのコトシロヌシの例にならない、それを伊勢神宮起源伝承譚（倭姫命の諸国遍歴）^⑩に当てはめると、「倭姫命」をどう捉えるかは暫くおくとして、王権中枢部からの女性司祭（齋王）の実質的追放を象徴するかに見えなくもない（伊勢齋宮の立地問題を論じたのではないが、最近の直木孝次郎氏は天照大神の伊勢への遷祀について「高皇産靈神を奉ずる河内政権が天照大神を奉ずる第一次ヤマト政権を圧倒した結果、天照大神は中央から遠ざけられ、流謫にも近い形で伊勢に遷された」^⑪との新見解を公にしている）。

しかし仮に、齋王制度を「天皇の二元的機能が一元的に収斂した結果、新たに生み出された制度」^⑫だと位置付けたとしてみても、そこから氏のように齋王の敗者的側面だけを強調して、伊勢齋宮の地理的な位置づけまでも説明するのはいささか飛躍があるように思う。それに関わった当時の人々が「王権と女性祭祀」をめぐる現代の研究者たちの分析結果と同じ認識で齋宮や齋王の存在を受けとめ、設置場所まで選んだとは到底考えられないからである。

以上、三説には重要な問題提起や指摘もあり学ぶべき点も多いが、必ずしも科学的根拠に基づく説とは言えない。同時に、①と②は予てよりある、「齋王は祭事に際して、日本の固有思想により旭に向かつて東面した」^⑬とか、また外宮に近い高倉山は「太陽神の降臨する聖地として崇拜され」、そのため「この山頂の巨石古墳の石室も東に向つて口を開いている」（同上）などといった想像的見解と、同じではないが、太陽信仰を基軸とする点では似通っているとの印象をうけた。この種の問題には当該地域社会の地理学的属性や政治・経済的、歴史

的な背景からも迫る必要がある。次節ではより形而下の問題として立地条件を考察してみたい。

（三）伊勢斎宮の立地条件と背景

①最も安定した土地

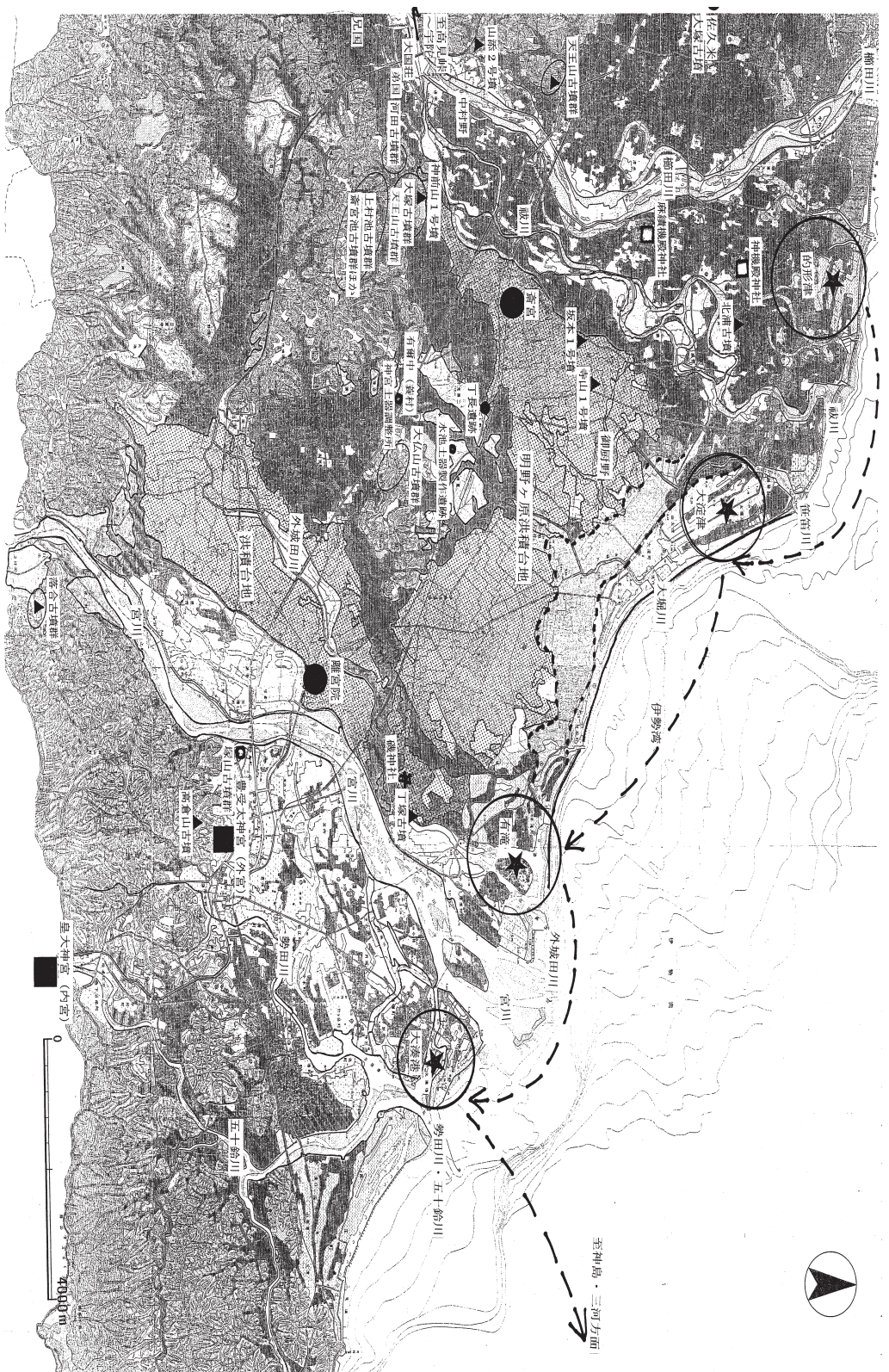
当面の対象となる土地の属性や成り立ちを知るために、南勢地域の「土地条件図」^⑮を掲げた（第一図）。現在、伊勢神宮のある場所は、宮川（延長約九一キロメートル）を内堀とし、櫛田川（延長約八六キロメートル）を外堀として、前方に海が広がり、後方は紀伊山地に連なる山塊を背負う護りには適した地理的環境にある。しかし、宮川右岸の旧伊勢市街地のほぼ全域に氾濫平野のほか自然堤防や砂堆（礫堆）、砂州が顕著にみられ、そこがすさまじい氾濫原だったと判る。宮川の大洪水はいま離宮院跡のある洪積台地にぶつかりと大きくL字状に屈折し、勢田川の洪水とも合して大量の土砂を繰り返して運び込んだであろう。

延暦一六（七九七）年に、度会郡沼木郷高河原に在った離宮院が宮川左岸の度会郡湯田郷宇羽西村へ移転する^⑯。その事情を『園太暦』所引の古記にいう「大神宮司解」は、「件の官舎は、去る宝龜四年に改造して以来、既に二六年を経て、皆悉く破損す、しかのみならず南北に河通じて、暴水の汎溢すれば、崩壊すること少なからざるなり」と述べている。また『太神宮諸雜事記』^⑰の和銅三（七一〇）年八月一六日条は、大風洪水による豊受神宮（外宮）の瑞垣と御門一字の流失を伝える。従来から、「それぞれの記述の信憑性は慎重に取り扱う必要

がある」^⑱とされる『諸雜事記』だが、本書は宮川、五十鈴川を含む都合二七回もの洪水被害も記録する。それらが六月から九月の間に集中しているのは、歴史時代にあつても、台風などによる宮川右岸地域の地理的不安定さは変わらなかったことを物語っている。

一方、斎宮跡の西側を流れる祓川と櫛田川は、度重なる洪水で流路が何度も動いた結果の姿を示している。元来、祓川筋が旧櫛田川の本流であり、多気川とも称した（以下本稿では両河川分流以前の時代については多気川と統一表記する）。この流域でも氾濫平野と自然堤防などが顕著である。流域に残る「中海（なこみ）」や「流田郷」^⑲といった地名に、繰り返された氾濫蛇行の歴史が刻まれている。記録に残る多気川の大洪水には、斎王久子内親王在勢中の承和一四（八四七）年、斎王媯子内親王在勢中の永保二（一〇八二）年、そして斎王姁子内親王在勢中の保安二（一一二一）年の三回^⑳が知られる。『高山寺文書』所収の承平二（九三二）年八月五日付け太政官符案には、「彼の河、承和十四年の比目を以て、古河の西北一里許りに移り流るるなり」^㉑とみえ、仁明皇女久子が伊勢斎宮在任中に起きたこの九世紀半ばの大洪水で、流路が西北へ一里許りも移動し、郡堺をめぐる地元に混乱のあつたことを伝えている。先の『諸雜事記』に洪水被害記事の頻出する宮川地域と同じ南勢地域にあるこの多気川流域でも、季節により同様の洪水被害のあつたことは十分に想定されて然るべきである。

また、現在の櫛田川左岸に拡がる沖積平野部は櫛田川低地の名で知られ、大部分は標高二メートル以下の氾濫平野や後背低地、さらには海岸平野や干拓地などからなっている。金剛川右岸域には五世紀後半



第一図 国土地理院発行「土地条件図」伊勢・松阪 (1:25,000) 昭和44年3月をもとに作図

代の佐久米大塚山古墳²³もあるが、元来その一帯は、伊勢湾の満潮時には地下からの湧水もあるなど、日常的に浸水害の避けがたい低湿地だったのである²⁴。

かくて宮川と多気川とに挟まれた広義の明野ヶ原洪積台地の上こそが、時ならぬ水害にさらされる心配がなく、安心して住める最も安定した土地だった。何よりこの事実が第一義である。

② 河川に近接した場所

ただ、この洪積台地の上でも立地場所は限定される。『延喜齋宮式』には次の規定があるからである。齋内親王が三時祭に参宮するときの禊の料に次いで、「右五月。十一月晦日。隨近川頭為禊。八月晦日。臨尾野湊為禊。其三時祭月十五日。齋内親王向離宮。（中略）十六日。（略）禊度会河。参入神宮。（略）十七日参太神宮祓禊御裳洗河。」とある。つまり、六月と一二月の月次祭参宮に先立ち、「近川」で禊をする必要があった。同じ洪積台地の上でも、近くに禊のできる川の存在が必要だったのである。ただ、前述したとおり、宮川も多気川も天候次第では暴れ川になることがありえた。幸いにも齋宮跡の東側にはエンマ川、笹笛川などの中小河川が流れている。従って、基本的には多気川で禊をしたが、『延喜式』段階では特定の河川名を指定せず、

臨機応変に対応できるよう「近川」としていたことは間違いない。

因みに、『日本書紀』の皇極紀元年八月甲申朔条に、「天皇幸南淵河上、跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨。遂雨五日。溥潤天下。於是、天下百姓、俱稱萬歲曰、至德天皇²⁶。」とみえるのは、伊勢齋宮とは直接関係はないが、天皇が自ら南淵河のほとりて雨ごいの祭祀を執り行っ

たと言う記事である。恐らく事前に南淵の河辺に臨んで禊はおこなわれたであろう。また、天武紀七年春に、「將祠天神地祇、而天下悉祓禊之。豎齋宮於倉梯河上。」²⁷とあり、天武自らが天神地祇を祀らむとして倉梯河のほとりに齋宮を建てたことがわかる。この場合も当然、禊の必要から「倉梯河のほとり」²⁸にあったことが窺える。それは天武紀二年四月にみえる大来皇女の「泊瀬齋宮」を「是先潔身、稍近神之所也」²⁹といい、事実、大来の泊瀬齋宮跡としても注目される桜井市の脇本遺跡から泊瀬川までは指呼の間にある事からも判る。古代では、間近に川を望めるようなやや小高い場所を「川の上（ほとり）」と呼んだのである。

こうして、ヤマトにおける皇族による祭祀儀礼の記述から推してみても、伊勢齋宮には近くに「禊に適した川」を望める場所にあることが何よりも不可欠の条件だったことが判る。

③ 外港の発達、水陸交通の要衝

伊勢齋宮の設置には、陸路と水路とが交差する交通の要衝であることも同時に要請された。なぜなら、『延喜齋宮式』には「諸国送納調庸并請受京庫雜物。積貯寮庫。支配雜用。」³⁰とあり、尾張・参河・遠江・駿河・相模・上総・常陸・下総・上野・伊豆・安房・美濃・信濃・志摩・伊勢・伊賀の諸国から絹紬や庸綿、紙、筆のほか、春米や粟・大豆・胡麻油などの食糧品、あるいは陶器など、少なくとも六八品目もの雑物が寮庫に搬入される規定があったからである。もとより『延喜齋宮式』が伊勢齋宮のどの段階の事実を反映しているかは別途重要な問題だが、ここでは他国からの物資の移動・搬入を類推する資

料として掲げた。

斎宮跡の周辺地域では二〇か所に及ぶ土器製作関連遺跡が発掘調査されている。祭祀に必要な大量の土師器の坏・皿類をはじめ、日常雑器などは斎宮寮近郊でも調達しうる条件はあった。³¹一方で、斎宮跡の調査では「美濃」と施印された須恵器片、猿投産や近江産をはじめとする大量の緑釉陶器なども出土しており、そうした器物は種々の物資と共に生産地から運ばれて来たのである。斎王の神宮祭祀への参入にも、公卿勅使が伊勢神宮に向うにも、志摩國から都へ贄を運ぶにも、京庫から斎宮寮庫へ雑物を請い受けるにも、幹線道路は不可欠、最重要の基本的な社会資本であった。幹線道路のない所に伊勢斎宮が設置されることはないのである。

第二図は史跡内で検出された伊勢古道と呼ぶ官道を示している。両側に側溝をもち、溝の心々間が約九メートル幅の直線道路で、³⁴史跡内の北西側から南東方向にかけて走る。これと同一規格の道路が、斎宮跡から南東へ約六百メートル隔てた、笹笛川左岸の丁長遺跡³⁵でも約三メートルにわたって検出され、少なくとも齋宮を通る古代の官道はまっすぐに同遺跡を経て、伊勢・志摩方面へと向かつて延びることが着実に証明されてきている。

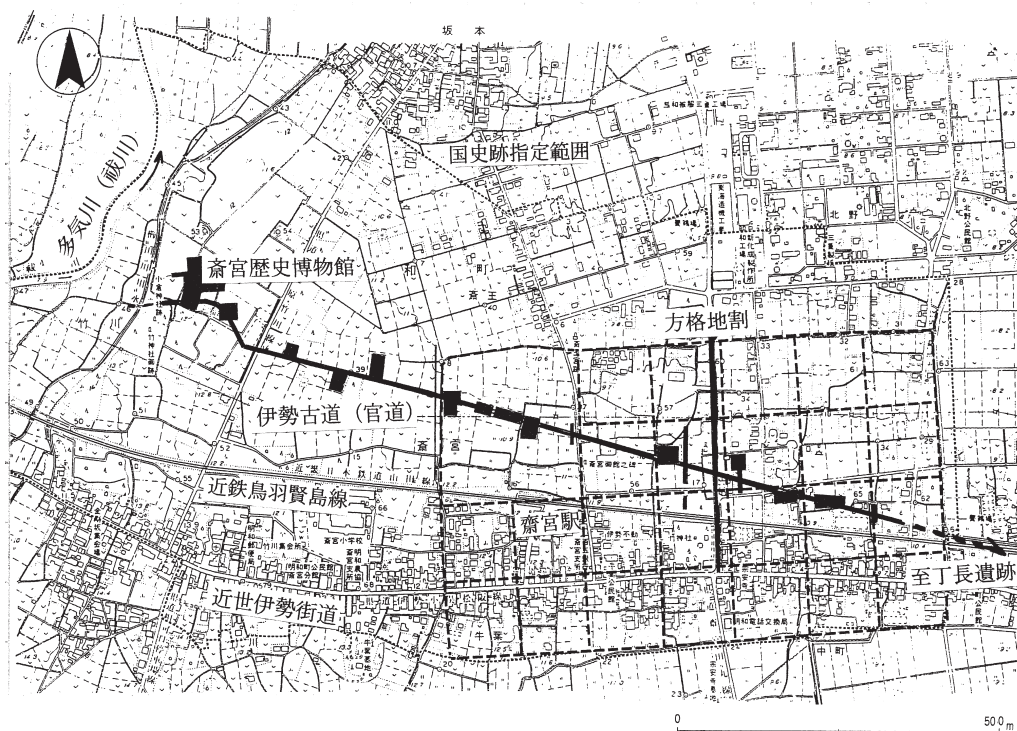
次に、海路水運についてみる。既に出土遺物の考古学的分析・検討に基づき、四世紀から五世紀前半代におけるヤマトから伊賀・亀山・鈴鹿・桑名を経て美濃・尾張方面へ向かう陸路に対し、伊賀・一志・松阪を経て、伊勢湾を航行し三河・遠江方面へ向かう海路の存在が提唱³⁶されている。和田萃氏はその玄関口として多気川河口の形的形津を想

定された。³⁷しかし、ヤマトからの形津に直行する道としては桜井・宇陀から高見峠越えて多気川沿いに伊勢湾岸に出るルートも重要であった。³⁸

「的形（円形）津」はすでに埋没したが、『伊勢国風土記逸文』には「的形浦者 此浦地形似的 因以為名 今已跡絶成江湖也³⁹」という。『万葉集』や『躬恒集』にも題材として詠われている。⁴⁰『日本書紀』斉明紀六（六六〇）年に「是歳、欲為百濟、將伐新羅、乃勅駿河國造船。已訖、挽至續麻郊之時、其船、夜中無故、艫舳相反。衆知終敗。」とみえ、この續麻郊を頭注は『和名抄』から「伊勢国多気郡麻績郷」とし、現「祓川河口付近に比定」している（三四八頁）。それはこの形津にはかならない。穂積昌裕氏が指摘したように、当時は外洋に航行できる軍用船が停泊できるだけの要津であったと推測される。

多気川下流域には神機殿神社と麻績機殿神社がある。ここでは現在も神宮の神衣祭にあわせて地元住民の手で機織りを行う。かつての令制による公的祭祀である月次祭と神衣祭が、少なくとも持統三（六八九）年に班賜された浄御原令の時代には伊勢神宮の公式行事として実施されていたことについては井上光貞氏の研究がある。⁴¹その神衣織成に従事したのが神服部（服部氏）と麻績連（麻績氏）で、両神社はその伝統を今に受け継ぐ。当時は神衣祭の織成に三河国の赤引糸を使用した。三河から海路で運ばれた糸を形的形津で荷揚げし、それを服部氏と麻績氏に織らせたのである。それゆえ的形津からは至近の位置にあったのであろう。

斎宮寮庫に調庸を送り納める諸国には東海から北関東に及ぶ地域を



第二図 史跡斎宮跡地内を走る伊勢古道（官道）
 （史跡斎宮跡平成11年度発掘調査概報所載第7図から作図転載）

	竪穴住居	掘立柱建物	柵列(塀)	井戸	溝(含側溝)	道路	土坑
弥生時代	7	0	0	0	5	0	29
古墳時代	1	0	0	0	0	0	5
飛鳥時代	27	8	3	0	1	0	11
奈良時代	335	368	25	17	172	11	738
平安時代	8	1568	78	78	234	5	1584
鎌倉時代	0	2	9	56	32	5	271
飛鳥～ 鎌倉時代 (小計)	370	1946	115	151	439	21	2604
室町以降	0	19	0	22	45	0	143
時期不明	2	102	12	16	112	5	444
合計	380	2067	127	189	601	26	3225

表(一): 斎宮跡の時代別検出遺構件数(抄) — 平成21年度166次調査まで —

※ 弥生～古墳時代の伊勢斎宮の施設に対応する官衙的遺構は一切検出されていない。
 ※ 平成18年度第150次調査までのデータベースに基づき筆者の責任で追加作成した。

含むが、とりわけその太平洋岸に面する諸国の場合は海路で人も物も運んだに違いない。それを形的形津（又は大淀津）で荷揚げし、多気川（又は笹笛川）の水運を利用して齋宮に近い船着場に着け、荷揚げしたと推測する。斎王が恒例の禊のみならず、斎宮寮の日常的経営には良好な外港とそれに連結する水路としての身近な河川がどうしても不可欠だったのである。

ところで、形的形津や大淀津から東海・関東方面に航行する場合、一気に伊勢湾を横断する船もあつたかも知れないが、「大部分が陸岸を見ながらの航海」だとすれば、基本的には瀬戸内を航行した遣新羅船にも似て、有滝（豊浜）→二見浦→飛島（浮島、牛島）・答志島→神島→伊良湖岬→三河湾→遠州灘以遠（この逆も）へと、複数の港津に寄港しながら航行した。その海運荷役の利害を管轄・差配する在地有力者の存在も想定される。そこで、伊勢斎宮に近い神前山一号墳と坂本一号墳の被葬者などについて少し考えておきたい。

【付説・金銅装頭椎大刀が結ぶ糸、多気と胸形と舒明一族】

すでに消滅したが、神前山一号墳は五世紀後半の帆立貝式前方後円墳で全長が四〇メートル、二段築成の墳丘は約五万個前後の葺石で覆われていた。一六〇余点の円筒埴輪のほか、明治三八年出土の三面の画文帯神獸鏡で知られる⁽⁴⁷⁾。県内の同型鏡には、亀山の井田川茶臼山古墳から二面、神島八代神社に伝世所蔵一面がある⁽⁴⁸⁾。この画文帯神獸鏡を共通項として神前山一号墳と神島との間に形的形津ないし大淀津という港津拠点を置いてみると、神前山一号墳の被葬者は当該海上交通の利害を所管した在地有力者の一人と想定することも可能であろう。

また、坂本一号墳（七世紀前半）はこの時期には珍しい前方後方墳で、木棺直葬の主体部から金銅装頭椎大刀（全長一・〇五メートル）が出土した⁽⁴⁹⁾。神話の世界ではアマツヒコホノニギノミコトが降臨する際に、天忍日命と天津久米命の二人が頭椎大刀を取り佩き先導している。従来この大刀は古墳時代後期の特に東国方面に多く、「渥美半島を経て遠江・駿河に線状に連なる分布状況が認められる」⁽⁵⁰⁾ものである。神島にも伝世される同じ大刀二点をも踏まえて岩原剛氏は、「古代の東国へのルート上の諸豪族へ配布された飾大刀だった」と意義付けをして、TK二〇九段階の「王権が東海のより広い地域を戦略的に統括しようとしていたのではないか」（同上）と指摘している。

坂本一号墳の被葬者も神前山一号墳の被葬者同様、形的形津―大淀津から神島を経て東海・関東方面へと向かう海上交通上の利害を管轄する在地有力者の一人であつた可能性は極めて高い。その被葬者としては、第一には竹首の一族か、あるいは大神神社起源説に倭迹速神浅茅原目妙姫や穗積臣の遠祖大水口宿禰と共に登場する伊勢麻績君（崇神紀七年八月己酉）の一族に連なる人物か、と想像するにとどめておきたい（後者は後の『皇太神宮儀式帳』に見える多気評督領麻績連広背へと連なるのであろう）。

神前山一号墳から坂本一号墳へと在地有力者の古墳の位置が約一五〇年の間に、より海側へと位置的に進出した背景の一つには、フェアブリッジ教授の海水準曲線による「七世紀頃の海退」現象のほか、対ヤマト王権との関係において、その政治情勢の変化を反映している可能性も考慮に入れておきたいところである。

そして、坂本一号墳の金銅装頭椎大刀を介して附言したいことは、伊勢と胸形（宗像）と舒明一族との政治的関係性である。玄海灘に面した宗像の宮地嶽古墳（旧称・津屋崎七〇号墳、宮地岳大塚古墳）からも坂本一号墳と同様に金銅装頭椎大刀が出土している。ただこの古墳は三五メートル前後の円墳と推定され、全長が全国第二位という横穴式石室（無袖）の最奥部に横口式石槨をもち、出土した金銅装頭椎大刀は復元長が実に二・四メートルもある。これは坂本一号墳の大刀の二倍強の長さである。七世紀前半代でも少し新しい段階（第二・四半期）の築造だとされ、その被葬者には胸形君德善が比定されている⁵⁵。大海人皇子がその德善のむすめ尼子娘を妃とし、子の高市皇子が壬申の乱で活躍したのは周知のとおりである。この両古墳築造の七世紀前半代に、都では「六三〇年代後半から六四〇年代の初め頃」に吉備池廃寺の創建があつたことを木下正史氏が明らかにされている。木下氏は発掘調査の成果を踏まえ、その吉備池廃寺こそ舒明が発願した百済大寺（後の大官大寺・大安寺）だとする。のちに大安寺のモデルともなる道慈留学の寺、長安の西明寺は顯慶元（六五六）年に皇太子の病氣治癒を祈願して創建されている⁵⁶。

以上、両古墳の規模や副葬品のグレードに差異はあるものの、同じく金銅装頭椎大刀を副葬した七世紀前半代の二つの古墳である。坂本一号墳は伊勢斎宮に近い洪積台地上から、的形津や大淀津の港津を見据える在有力者の古墳であり、玄海灘を望む津屋崎古墳群（宮地嶽古墳を含む）は朝鮮半島への海上交通路の所管を担い、沖ノ島祭祀にも関係した胸形君一族の奥津城であつた。西国には出土例の少ない頭

椎大刀が副葬された事実を重視すると、ほぼ同時代に生きた両古墳の被葬者は、舒明一族（天智・天武）との政治的関係において、西（対朝鮮半島）と東（対伊勢以東）の重要な港津（玄関口）の掌握に直接かわり、ヤマトの王権からいわば相似形の役割を期待されそれを担った人物だった、と以前から主張している⁵⁹。

古代王権にとって恒常的に道路、渡河点や港津などの要衝の地を所管・支配する政治的・経済的な意義はなによりも重要であつた。伊勢神宮の祭祀にかかわる伊勢斎宮の場合にも、それを安定的に維持経営するに相応しい立地場所としては、①洪水被害の恐れがない最も安定した土地、②しかも河川には近くて、恒例の禊に適した場所が常に確保でき、③都との血脈たる官道と、発達した外港とそれに連絡する水運条件を備えたいわば水陸交通の要衝の地であることが不可欠の条件であつた。これらの条件をすべて満たす場所は、多気川（右岸・宮川（左岸）両河川の沿岸部にあたる明野ヶ原洪積台地の縁辺部――伊勢斎宮の場合はそれが神郡の西の境界に位置した――を置いて他にはありえなかつたのである。ではなぜ、より神宮に近い宮川左岸ではなく遠く離れた多気川右岸だったのか、その歴史的背景を次項で考えたい。

④王権による土地開発

天武天皇や聖武天皇は伊勢国から広大な土地を大安寺に施入した事実がある。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、天武天皇の歳次癸酉、即ち即位後間もない天武二（六七三）年に伊勢国から施入された墾田地六六二町のうち、八〇町が多気川流域に展開した飯野郡中村野からの施入である。この天武二年は、舒明発願による百済大寺

(古備池廃寺)が百済川(米川)のほとりから、高市という地に移転されて高市大寺(後の大官大寺・大安寺)となった正にその年に当たる。⁶²従って、天武のこの施入には、父の百済大寺を引き継ぐ新たな高市大寺の营造という国家的大事業が背景にあったと考えるべきであろう。

ところで先の『資財帳』や『平安遺文』等から、飯野郡中村野の条里を丹念に復元した山中章氏は、「多気郡には少なくとも天武朝に二〇〇町以上、桓武朝までには四〇〇町以上の土地が王権の下にあった」⁶³との結論を得、かつ、中村野周辺にある山添二号墳(六世紀後半代)や河田A三号墳(六世紀末〜七世紀前半頃)の副葬品を傍証の根拠として、少なくとも当地と王権との関係は六世紀以来の歴史があるとした。

松阪市山添町字上山にある山添二号墳は径約一六メートルの円墳で、主体部には木棺直葬跡が二か所あり、いわゆる田辺編年のTK四三様式に相当する須恵器や馬具・玉類のほか、掘じり環頭金具をもつ直刀二振りが出土したことで知られる。⁶⁴藤ノ木古墳の出土遺物にも含まれる掘じり環頭金具は、三重県内では井田川茶臼山古墳(亀山)と保子里一号墳(鈴鹿)にしかない。山中氏によれば、井田川茶臼山古墳は伊勢国で初の横穴式石室を採用した首長墓であり、画文帯神獸鏡の出土があることは前述のとおりである。

一方、多気郡多気町河田字東谷にある河田古墳群は、百基からなる群集墳である。尾根筋に沿ってA〜C支群に分かれるが、一五基の方墳を除いた他はすべて径一〇〜二〇メートル級の円墳である。就中、

山中氏は鈴鹿市の岸岡山古窯(六世紀後半)の指標土器とする須恵器脚付短頸壺が河田A三号墳⁶⁶から出土している点にも注目した。

その上で山中氏は、井田川茶臼山・保子里両古墳の造営は「伊勢北部地域への新たな勢力の浸透」⁶⁷を示唆するもので、それ以後に伊勢国での横穴式石室が定着するとみ、南勢多気川流域で「その新しい王権」といち早く関係を結んだ勢力」(同上)として山添二号墳を評価し、それにつづく「河田古墳群の首長層も北勢地域の新しい権力と無縁ではない」(同上)とした。そして、伊勢国北部に進出した新たなヤマト王権が支配権を及ぼしていく過程を三期に分け、南勢中村野周辺の在地有力者層との関係を整理し、「河田古墳群の被葬者達こそ、王権が確保した大安寺の所領を中心に飯野・多気両郡北部の王権の土地を開発した人々ではないか」⁶⁸と提起した。ただ、古墳の築造年代だけでいえば、多気川左岸の天王山古墳群(五世紀中葉〜七世紀後葉)などの被葬者らも決して無関係ではないと推測しうるところではある。

山中章氏の上記見解を一つの前提として、山添二号墳から河田A三号墳に至る時期をヤマト王権における敏達・用明・崇峻・推古・舒明〜孝徳朝の時期に重ねた時、伊勢国では竹氏・麻績氏らの両在地有力者たちはもとより、鈴鹿を本拠地としたとされる大鹿氏一族の動向も重要なのではないかと考えた。次に蘭田香融氏の研究成果⁷⁰に導かれて、多気川流域に大鹿氏一族の政治力を窓口としてヤマト王権の力が及んだ経緯を推定し、前記の考古遺物が鈴鹿方面からもたらされた因果関係を説明する一助としてみたい。

蘭田氏は、『日本書紀』大化二(六四六)年三月の皇太子(中大兄

皇子）の奏請にいう「皇祖大兄御名入部」が息長氏の管理した押坂部を中心に構成されていたこと、そしてそれが「彦人大兄皇子から妃・糠手姫（田村皇女）、その子舒明天皇（田村皇子）、孫・中大兄皇子に伝領され、大化改新―蘇我氏打倒のための重要な経済的源泉」（同上）であったことなどを説明された。

蘇我氏との血縁を持たぬ押坂彦人大兄皇子（敏達の子）は即位できずに終わった悲運の皇子だが、その妃糠手姫皇女は他でもない、伊勢大鹿首小熊の娘菟名子を敏達の夫人として納れた結果生まれた孫娘（外孫）である。⁽⁷¹⁾後に嶋皇祖母尊とも呼ばれた糠手姫皇女は晩年を飛鳥嶋宮に住み、壬申の乱後に大海人皇子はその嶋宮に入っている。母方の外戚氏族になる伊勢大鹿氏一族としては、孫むすめ糠手姫皇女が彦人大兄皇子との間に生んだ田村皇子（外曾孫）即ち舒明の即位（六二九年）には、大いに歓喜したことであろう。⁽⁷²⁾

藺田氏は、当時の皇室が蘇我系と敏達直系の非蘇我系とに二極分化の様相を呈したのは、蘇我氏による露骨な外戚化政策に対して危機感を持った皇室側の自己防衛策の所産と位置づける。蘇我氏と血縁関係をもたない彦人大兄―舒明皇統による純血性保持の意識が「蘇我氏の外戚支配を排除し、舒明の即位を経て、大化の改新を導き出し」、⁽⁷³⁾さらに天皇神格化や天武朝の皇親政治へと継承されたという、重要な指摘をおこなっている。

后妃の資養やその子女の養育には生家がかかわるという前提に立てば、大鹿氏の娘菟名子の場合には夫人ゆえ皇后（息長氏の廣姫）と同列ではないが、糠手姫皇女や田村皇子（舒明）らの経済基盤獲得・拡大

強化に対する後方支援の意味からも、外戚大鹿氏が伊勢国内で新たな経済的基盤獲得のために、在地首長層竹首一族や麻績君一族らの協力を得て、力を注ぐのは当然ではないか。しかも、彦人大兄皇子の居所の在った桜井市押坂の地は、舒明陵もある彦人大兄―舒明一族の本拠地であるばかりでなく、大和南部から宇陀地方を経て、高見峠越え多気川ルートでの形・伊勢湾に直結する重要な古道の入口にもあたっていたのである。⁽⁷⁴⁾（藺田氏は、そこにはかつて允恭の後妃忍坂大中姫命が居住し、その名代である押坂部の置かれたところだともしたが、允恭紀の記述を批判した山尾幸久氏の説もある。）⁽⁷⁵⁾

伊勢神宮起源伝承を後の『皇大神宮儀式帳』⁽⁷⁶⁾でみると、倭姫が多気の佐々牟迺宮に至ったときに竹首吉比古が自らの国名を「百張蘇我の国。五百枝刺竹田の国」と答える件がある。この「蘇我の国」とは、あるいは多気郡内にはかつて蘇我氏が政治的・経済的関係を築いていた事の反映と想定することは無意味であろうか。⁽⁷⁷⁾

その是非とは別に、蘇我氏滅亡に前後して、敏達直系の彦人大兄―舒明―中大兄・大海人皇子らの皇統は、重要な伊勢湾西岸の港津に近い多気川流域に政治的・経済的基盤を構築して東国方面ルートの掌握と安定化をはかる必要性があった。それは恐らく、舒明朝前後の頃から徐々に進行し、中大兄皇子（天智）らの時代に確定した土地を天武が引き継いだと推測する。尼子娘の故郷胸形の宮地嶽古墳と共に、金銅装頭椎大刀を副葬した多気川右岸の坂本一号墳の存在は、舒明一族による当地への政治・経済的進出を裏付ける宗教的象徴とも読み取れる。そういう政治情勢下で、菟名子貢納以来、敏達直系の皇統（舒明

一族」との関係を保持し得た伊勢大鹿氏一族の現地での働きを想定することは必ずしも不自然ではなく、母方の外戚氏族であればこそ可能な政治・経済的活動だったのではないだろうか。後に、聖武の大仏建立に際し大鹿氏が称揚されたのも、舒明一族との長期にわたる政治的関係を物語るのである。

亀山・鈴鹿方面の古墳に特徴的な遺物が多気川流域の山添二号墳や河田A三号墳に副葬されるに至った背景には、ヤマトにおける舒明一族の皇位継承をめぐる政局の動きに伊勢国内で呼応した大鹿氏一族らの動向、特に多気川流域の農耕地開発の動きがあり、その結果が反映されたものではないか、と推測する所以である。

以上、伊勢斎宮が多気川右岸の絶妙の位置に置かれた背景には、少なくとも天武朝に高市大寺（大安寺）へ八〇町もの土地を寄進し得るだけの、舒明一族の政治的・経済的な基盤がそこにはすでにあったからである。伊勢斎宮とはそういう場所に設置されたものにほかならない。

（四）まとめ

以上、①から④まで四項目にわたり卑見として述べたところをまとめておきたい。

①多気川（祓川・櫛田川）と宮川とによってその東西を区切られた広義の明野が原洪積台地の上こそは、南勢地域において唯一の洪水被害の心配がなく安住できる土地であった。

②併せて、伊勢神宮祭祀に先立つ恒例の禊のためには、どうしても

適切な河川を近くに臨む場所（河のほとり）でなければならなかった。

③同時に、斎宮寮による伊勢斎宮の経営にはさまざまな物資などを寮庫に運び込むに至便な、都との血脈である官道と同時に発達した外港とそれを結ぶ水運とが必要不可欠であった。すなわち、水陸交通の要衝でもあることが要請された。

これらの条件をすべて満たす場所としては、伊勢神郡の西の境界にあたる多気川右岸の台地上か、あるいは離宮院跡のある宮川左岸の台地をおいて他にはなかった。

一方、多気川流域には舒明皇統（天智・天武）に直結する土地が早くから拓かれたという事実があった。それはヤマト王権内部の、蘇我氏による露骨な外戚化政策をめぐる政争を背景としていたであろうと推測した。同時にそのことは、舒明一族の本拠地でもある押坂・宇陀から高見峠越えの多気川ルートで直行できる伊勢湾岸の港津（的形津・大淀津など）のもつ政治・経済的価値を抜きにしては語れない問題でもあった。すなわち、

④伊勢斎宮が多気川右岸域に設置されたのは、天武二年段階で高市大寺へ八〇町もの土地を寄進できるほどの、政治的・経済的基盤がそこには既に形成されていたからにほかならない。その際、坂本一号墳の被葬者が、早く尼子姫を介して天武（大海人皇子）との政治的関係を強化していた胸形君德善と同種の新羅装頭椎大刀を副葬していた事実は、即位後間もない天武天皇が当初から多気川下流域に広大な土地を勢力下に収めるに至っていた、まさにそ

の政治的経緯と決して無関係ではなかったのである。

そしてその事は、すでに四三年間に及ぶ齋宮跡の発掘調査において、七世紀後半を遡る伊勢齋宮関連の遺構がまったく検出されないという事実と見事に符合する。過去の発掘調査は祓川右岸の河岸段丘、近鉄線路敷地内、第四種住宅地などを除く史跡内の全地区に最低でもトレンチ調査は実施してきており、地区ごと地下の遺構状況は概ね把握されている。調査可能な所で発掘調査の鍬が入っていない地区はほとんどない。従って「検出されない」という事実は暫定的ではあれは結論にも近く、今後ともそれより古い時期の伊勢齋宮の遺構はまず出ないことを意味する。これはきわめて重要な、厳然たる科学的根拠と認識すべきであろう。

加えてそこが神郡の玄関口であったことも重要である。伊勢国衙は遠く鈴鹿にあり、国衙―郡衙を通じた神郡内雑務の遂行には種々の困難も予想されたに違いない。多く国司らの怠慢事情⁽⁸²⁾もあれば、神事に名を借りた禰宜層・神郡司・百姓らの反律令的行為や利害の対立など、さまざまな軋轢や抗争も起こりえた。結果論かも知れないが、多気川右岸という神郡の境界(出入口)に令外の官とはいえ時の公的機関を置くこと自体に、寮―神郡司を通して神郡内を行政的に監督する機関としての機能も当初は期待されたのではないかと推測する。

[注]

- (1) 新訂増補国史大系『続日本紀』(吉川弘文館、一九七二年)、前篇、卷一、三頁。
- (2) 井上辰雄「太陽祭祀と古代氏族」(松前健・白川静ほか編『古代日本

人の信仰と祭祀』大和書房、一九九七年)、二二～三四頁。

- (3) 三村幹弘「伊勢齋宮の立地に関する考察―「神島」古代祭祀との関連を中心に―」(筑波大学芸術研究報二二・別冊、二〇〇二年三月)、一～六〇頁。

- (4) 故・金子裕之氏は神島神宝調査報告の中で、この神宝の性格につき「近年は過大評価の傾向が目立つ」と戒めていかれた。同氏「三重県鳥羽八代神社の神宝」(独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所編『奈良文化財研究所紀要』、二〇〇四年、六六～六七頁、二〇〇五年、二四～二五頁)。

- (5) 林一馬「齋宮の成立時期とその位置について」(『伊勢神宮・大嘗宮建築史論』中央公論美術出版、二〇〇一年)、三五五～三六九頁。

- (6) 山口昌男著『天皇制の文化人類学』立風書房、一九九〇年、『文化と両義性』岩波書店、二〇〇〇年。

- (7) 折口信夫「最古日本の女性生活の根柢」『全集』第二卷(中央公論社、一九六五年)、一四七頁。

- (8) 洞富雄「原始齋宮から皇后へ」『天皇不親政の起源』(校倉書房、一九七九年)、七六頁。

- (9) 山尾幸久「初期ヤマト政権の史的性質」『日本古代王権形成史論』(岩波書店、一九八三年)、一〇〇頁。

- (10) 宮田登著『生き神信仰』(塙書房、一九七〇年初版、二〇〇三年オンデマンド版、四六～四九頁)。

- (11) 直木孝次郎著『伊勢神宮と古代の神々』(吉川弘文館、二〇〇九年)、七一～八五頁。氏の新見解は溝口睦子氏の『王権神話の二元構造』(吉川弘文館、二〇〇〇年)を踏まえてなされた。

- (12) 註(10)前掲宮田氏『生き神信仰』第二章「天皇信仰の構造」、四二～五二頁。

- (13) 中村哲「齋宮考」『文学』四六号(岩波、一九七八年一月)、一七頁。創建以来不変か否かは知らないが、伊勢神宮正殿は参拝者が北面する形に建つ(福山敏男著『伊勢神宮の建築と歴史』、日本資料刊行会、一九七六年所収巻末附図第三・第四、第八・第九参照。齋宮跡で、

- 「斎王が東面する」べき性格の建物は寡聞にして知らない。東面して行う祭祀は古代中国にもあり日本固有の思想かどうかは不詳である。
- (14) 岡田精司「伊勢神宮の起源―外宮と度会氏を中心に―」『古代王権の祭祀と神話』（塙書房、一九八四年）、三三六頁。現地に立てば判ることだが、高倉山古墳の石室はほぼ南西（乃至西南西）方向に向かつて開いており、岡田氏の想像とは違う。西宮秀紀「伊勢神宮成立論」（『伊勢湾と古代の東海 古代王権と交流』⁴ 名著出版、一九九六年）、一二〇頁の注（二六）にも指摘がある。
- (15) 国土地理院発行「土地条件図」（一・二五〇〇）伊勢・松阪（昭和四四年三月）をもとに作図した。
- (16) 離宮院の移転記録は、『神宮雜例集』所引の「延暦十六年丁丑八月三日官符」や『園太曆』所引の古記を基本とする。
- (17) 『園太曆』卷六（統群書類従完成会、一九八五年）、九六―一〇六頁。延文二年十二月三日～九日の間の「月次祭官幣發遣下著離宮院事」。古記所引延暦十六年八月廿一日付け神祇官符中に引用した件がある。
- (18) 『群書類従』（統群書類従完成会、一九八三年）第一輯、卷第三「元明天皇」（七四頁下段）参照。以下「諸雜事記」と表記する。
- (19) 吉田晶「県造小論―伊勢神宮との関係を中心として―」（岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上、塙書房、一九八四年）、八二頁。
- (20) 註（18）前掲『群書類従』卷第四、『神宮雜例集』第一、一四二頁に「神服機殿。在多気郡流田郷服村。麻績機殿。在同郡井手郷。」とみえる。
- (21) 角田文衛監修・（財）古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』本編下（角川書店、一九九四年）、一五五頁「多気川」の項。斎宮歴史博物館編『斎王のおひざもと―斎宮をめぐる地域事情―』（二〇〇六年一〇月）、一五頁の掲載図版中段、右から六行目以下。『平安遺文』所収「二四二 伊勢太神宮司解案」（三五五～三五八頁）。
- (23) 末永雅雄著『増補日本上代の甲冑』本文篇、木耳社、一九八一年、五四～五五頁。三重県史編纂室編『三重県史』資料編考古一、二〇〇五年、五〇二頁。
- (24) 佐久米大塚古墳群の一つ丸山古墳の西側で実施した発掘調査では、満潮時の湧水に難渋している（三重県埋文センター編『大見遺跡発掘調査報告』、二〇〇九年）。
- (25) 改訂増補国史大系『交替式・弘仁式・延喜式前篇』（吉川弘文館、一九八三年）、一一八頁。
- (26) 『日本書紀』下（日本古典文学大系68、岩波書店、一九七〇年）、二四一頁。なお、『吾妻鏡』（建保二年六月五日）にも皇極紀当該条を引くが、「帝、河の上（ほとり）に幸し」と訳したいところである。
- (27) 註（26）前掲『日本書紀』下、四三一頁。
- (28) 中国で河上郡を河上とする例（漢書高帝紀二年十一月）もあるが、通常、例えば左氏傳襄公九年二月「晉侯以公宴于河上」の河上は「黄河のほとり」を意味し（鎌田正著『春秋左氏伝』二、明治書院、一九九三年）、北魏太武帝の太平眞君二年正月丙戌朔「大會群臣於江上」（魏書卷四下）は、通常は京師で行う大會を「長江のほとり」で行ったとの意。大業十三年十一月（丙辰）、唐高祖は「移營舍於長樂宮澧川上」（大唐創業起居注）（上海古籍出版、一九八三年、卷二、三七頁）という。澧川は隋唐長安城の北東約十数kmで渭河に注ぐ關中八川の一つ。彼が營舍を移した長樂宮はその「ほとり」に在ったことになる。「かわかみ」では上流域に限定するゆえ、南淵河上も倉梯河上も「ほとり」と訓むべきであろう。
- (29) 註（26）前掲『日本書紀』、四一三頁。
- (30) 註（25）前掲『延喜式』卷五「斎宮」、一二七～一二八頁。
- (31) 斎宮跡でも土師器焼成坑は数基検出例あり。斎宮跡の南東約一・五kmに在る北野遺跡は南北九二五m×東西五四〇mと広範囲で、『和名抄』の「有貳郷」に属す。弥生から奈良時代に及ぶ住居群（竪穴住居二三七棟、掘立柱建物七四棟）と二二五基（古墳時代～奈良時代）の土師器焼成坑を検出、当地域有数の土師器生産遺跡である（三重県埋文センター編『北野遺跡（第二・三・四次）発掘調査報告』、一

- 九五五年、『北野遺跡(第五次)発掘調査概報』、一九九六年)。斎宮跡の東方約2kmにある水池土器製作遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・粘土溜などを土器焼成坑が取り囲むように検出された。斎宮研究会編『斎王宮跡発掘』、一九七九年。三重県編『三重県史』資料編・考古2、二〇〇八年参照。
- (32) 第四三一次調査で「美濃」刻印陶器(高台付坏)が出土。また、七〇〇〇点を超す緑釉陶器は京都・猿投・東濃・近江産のほか一部は二川窯(豊橋)のものもある。斎宮歴史博物館編『斎宮跡発掘資料選』、一九八九年、一〇頁、同『発掘資料選』II、二〇一〇年、一〇一頁。
- (33) 斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成二年度発掘調査概報』、第三一図、同『史跡斎宮跡平成一四年度発掘調査概報』第四一I図など参照。木下良「日本の古代駅路と世界の古代道―特にローマ道との比較を主にして―」(国学院大学日本文化研究所編『律令法とその周辺』、二〇〇四年)は発掘調査成果から「九メートル」道路の存在を明記し、「概して古い時期のものほど道幅は広いようである」(二六〇頁)と述べる。
- (35) 三重県埋文センター編『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査IV・丁長遺跡(第一次)・大谷遺跡(第一・二次)発掘調査報告』、二〇〇九年、一三、一七〜一八、二〇、三二〜三六頁。
- (36) 泉森皎「大和から伊勢湾への路」(上田正昭編『探訪古代の道』第二卷、法蔵館、一九八八年)、五四〜八二頁。高橋克壽著『埴輪の世紀』、講談社、一九九六年。桑名市教育委員会編『高塚山古墳基礎調査報告書』、二〇〇六年、五九頁。高嶋弘志「神郡と古代交通路」(佐伯有清編『日本古代政治史論考』吉川弘文館、一九八三年)、九五〜一〇六頁。
- (37) 和田萃「伊勢と王権」(『東海の埴輪と宝塚古墳』松阪市教育委員会、二〇〇三年)、五四〜五九頁。
- (38) 直木孝次郎「大和と伊勢の古代交通路―高見峠越えについて―」(『大和文化研究』第九巻七号、一九六四年、一〜一三頁。同氏著『飛鳥奈良時代の研究』、吉川弘文館、一九七五年に収録)。
- (39) 秋本吉郎校注『風土記』(日本古典文学大系2、岩波書店、一九七二年)、四三三頁。
- (40) 小島憲之ほか校注・訳『萬葉集』一(日本古典文学全集・小学館、一九八七年)巻第一、九六頁・六一番歌。前掲『群書類従』正編第十五輯・和歌部、巻第二六一所収「躬恒集」、二六五頁「まとかた」。
- (41) 註(26)前掲『日本書紀』下、三四七〜三四九頁。
- (42) 穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」(『考古学に学ぶII』、同志社大学考古学シリーズVIII、二〇〇三年)、三三五頁、同「海洋地域の社会と祭祀」(季刊『考古学』第九六号、二〇〇六年)。
- (43) 井上光貞著『日本古代の王権と祭祀』(東京大学出版会、一九八四年)、三七〜五八頁。
- (44) 茂在寅男著『古代日本の航海術』(小学館、一九九二年)、一二四頁。
- (45) 註(40)前掲『萬葉集』四、巻一五。天平八年二月任命遣新羅使らの歌参照。
- (46) 註(42)前掲、穂積氏論文「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」参照。
- (47) 明和町教育委員会編『神前山一号墳発掘調査報告書』、一九七三年。澄田正一「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について―櫛田川流域の調査を中心にして―」(『近畿古文化論叢』吉川弘文館、一九六三年)、一八五〜一九七頁。吉村利男「三重県内の古鏡出土に関する覚書(その一)」(『三重県史研究』第十六号、二〇〇一年)、一二六〜一二七頁。川西宏幸著『同型鏡とワカタケル―古墳時代国家論の再構築―』、同成社、二〇〇四年、三六〜五〇頁、ほか。
- (48) 註(4)前掲金子裕之「三重県鳥羽八代神社の神宝」六六頁。穂積裕昌「海洋地域の社会と祭祀―海上交通と神島神宝をめぐる諸問題―」(季刊『考古学』第九六号、雄山閣、八四頁)。
- (49) 『三重県史・資料編考古一』(二〇〇五年)、第四章、五一四頁「坂本一号墳」(中野敦夫氏執筆)。

- (50) 後藤守一「頭椎大刀について(二)」、『考古学雑誌』二六卷一二号、一九三六年、七六一頁。岩原剛「副葬品の変質―東海地方における後期古墳の副葬品から―」(『東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会編『東海の後期古墳を考える』二〇〇一年)、四一―一頁。
- (51) 岩原剛「東海の飾大刀」(立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集II』、二〇〇一年)、一八三頁。同氏「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」(島根県教育庁古代文化センター・同埋蔵文化財センター編『装飾付大刀と後期古墳―出雲・上野・東海地域の比較研究―』、二〇〇五年)、四八頁。
- (52) 須惠器の形式編年の一つ。田辺編年のTK二〇九は中村編年ではII形式五段階に相当。絶対年代観には七世紀初頭から前半、と六世紀末―七世紀初頭、とがある。ほぼ推古朝に当たるか。
- (53) 山本武夫著『気候の語る日本の歴史』(そして、一九八二年)、一二―一三〇頁。吉野正敏氏も「大化の改新から約百年間、七世紀前半から奈良時代初頭までは寒冷だった」(四―一〇世紀における気候変動と人間活動)、『地学雑誌』一一八(六)号、二〇〇九年、一二二―二頁という。
- (54) 福岡県教育委員会編『福岡県重要文化財解説 国宝篇』、一九五二年、五四頁。
- (55) 津屋崎町教育委員会編『津屋崎古墳群I』(町文化財調査報告書第二〇集)二〇〇四年、五八―七〇頁。
- (56) 註(26)前掲『日本書紀』下、四一〇―四一一頁、天武天皇二年二月丁巳朔癸未条。
- (57) 木下正史著『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』(角川書店、二〇〇五年)、一八七頁、及び一九四頁。
- (58) 小野勝名著『中国隋唐長安・寺院史料集成』解説篇、法蔵館、二〇〇一年、一四六頁。
- (59) 二〇〇七年一月一日、奈良女子大学での講演「斎宮はなぜここに置かれたのか」。その後、溝口睦子氏にも「東方への交通の要衝と

- しての伊勢と朝鮮半島及び中国大陸へ向かう北の出入口沖ノ島はヤマト王権に重要視された」(『アマテラスの誕生―古代王権の源流を探る』、岩波書店、二〇〇九年、第四章、一四八頁)との見解がある。
- (60) 宮川左岸の台地縁辺部の場合、外港は宮川・外城田川河口にある有滝港の辺りに比定でき、在地有力者の存在は、伊勢市西豊浜町野依の丁塚古墳(五世紀末築造)などによって象徴される。皇学館大学考古学研究会編『伊勢市とその周辺の古墳文化』一九九二年、一〇五―一〇六頁、及び『伊勢市史』第六巻考古編、二〇一一年、一四一―一四四頁。
- (61) 前掲『群書類従』第二四輯・釋家部、巻第四三五、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、三八九頁。
- (62) 前掲『日本書紀』下、四一四頁、天武二年十二月戊戌条。前掲『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、三七八頁、『大安寺縁起』三九三―三九四頁。木下氏前掲書第八章を参照。
- (63) 山中章「伊勢国北部における大安寺施入墾田地成立の背景」(『ふびと』第五四号、二〇〇二年)、及び「伊勢国飯野郡中村野大安寺領と東寺大國庄」(『三重大史学』第二号、二〇〇二年)。
- (64) 中村編年のII形式四段階に相当。六世紀後半―七世紀初頭とするか、六世紀中葉―後半とするかは研究者にもよる。ほぼ欽明朝から推古朝にわたる時期に相当と判断。
- (65) 松阪市教育委員会編『山添二号墳発掘調査報告』、一九九八年。報告者は、掘じり環頭金具などの副葬品の存在から王権との深い繋がりをも想定している(一四頁)。
- (66) 多気町教育委員会編『河田古墳群発掘調査報告I』、一九七四年。A三号(二二号)墳は並行する二基の主体部からなる木棺直葬の古墳。北側の第二主体部はほぼ最頂部に位置し、大小二基の木棺痕跡があった。大きい方の木棺跡から刃部長八二・五cmの直刀も一本出土。
- (67) 『三重県史』資料編考古一(二〇〇五年)、五〇八―五一頁、下村登良男氏執筆「河田古墳群」参照。
- 註(63)前掲『三重大史学』第二号所収、山中氏論文…九頁「中村野

- 周辺の歴史環境。
- (68) 註(63)前掲『三重大史学』第二号所収、山中氏論文・九頁「飯野郡中村野周辺と王権」。
- (69) 聖武の乳母の一人を出したという大鹿氏の本拠地は、式内社大鹿三宅神社のある鈴鹿市説と、相鹿上神社のある多気町説とがある。共に祭神は大鹿首の祖天児屋(根)命。吉田東伍は「大鹿は相可と相異なり、河曲郡に属す、相可と混ぜべからず」(大日本地名辞書、上方・第二巻、八四五頁)とした。
- (70) 藺田香融「皇祖大兄御名入部について―大化前代における皇室私有民の存在形態―」(『日本書紀研究』第三冊、塙書房、一九六八年所収)、一六九～二〇九頁。
- (71) 註(26)前掲『日本書紀』下、一三九頁、敏達天皇四年正月条。
- (72) 註(26)前掲『日本書紀』下、三八三頁、天武即位前紀。渡瀬昌忠「島の宮(上・中・下)―人麻呂文学の基点―」『文学』三九巻、岩波書店、一九七一年九月号、一〇月号、一二月号。
- (73) 上井久義「伊勢神宮の成立」(『史泉』第四一号、関西大学史学会、一九七〇年)、二六頁。
- (74) 註(70)前掲、藺田氏論文、一七八～一八四頁(三「彦人皇子略伝」(1) 政治的境遇)。
- (75) 註(70)前掲、藺田氏前掲論文、一九二頁。
- (76) 倭姫巡幸譚が「宇太乃阿貴宮」から始まるのも斎王による伊勢神宮祭祀の創成が舒明一族と深く関わる事を暗示する。伊賀・淡海・飛騨を経て伊勢へと至る巡幸路の設定も壬申の乱を踏まえて初めて出る着想である。また、『延喜大神宮式』が宇陀郡に二町の神田を割当てたのも伊勢神宮、伊勢齋宮と舒明一族との原初的な関わり的一端を裏付けはしないかと、一応推測している。
- (77) 註(9)前掲、山尾氏著『日本古代王権形成史論』II編三章一節、一五八頁。
- (78) 前掲『群書類従』第一輯神祇部、巻第一「皇大神宮儀式帳」、三頁上段。
- (79) 「蘇我の国、竹田の国」と聞けば、用明紀二年七月条に物部(守屋大連)氏討滅軍に参加した蘇我馬子と竹田皇子をつい想像してしまう。大鹿氏の名は『続日本紀』天平勝宝元年四月甲午朔の勅に「可治賜人」の一人として再び登場する。宝龜七年正月の叙位記事に出る大鹿臣子虫がその後裔ならば、敏達紀四年以来伊勢地方で少なくとも二百年間は存続した豪族である。拙稿「聖武天皇の伊勢行幸と関宮について」(坂本信幸編『聖武天皇の時代』高岡市万葉歴史館、二〇一三年)四五～四六頁。
- (81) 別表(一)は毎年の発掘調査結果に基づく主な検出遺構のデータを時代別に集計したもの。どの遺構も全体の約八〇%から九七%に達する範囲で飛鳥・鎌倉時代に集中する。
- (82) 例えば、註一前掲『続日本紀』後篇、天平寶字五年八月癸丑朔条など参照。
- (付記：ご協力を戴いた泉雄二、大川操、木野本和之、田村陽一、西村美幸の五氏に謝意を表します。)

(たさか ひとし 文学研究科日本史学専攻博士課程)

(指導教員・門田 誠一 教授)

二〇一三年九月十日受理